

タイトル:平成 18(2006)年度 教育セミナー

日時:平成 18 年 9 月 19 日(火)～22 日(金)

場所:東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究 3 階 マルチメディア会議室(304)

### 相川 洋介(上智大学大学院グローバル・スタディーズ研究科)

9 月 19-22 日の 4 日間、今年で 2 回目となる AA 研主催の中東・イスラーム教育セミナーに参加させて頂いたが、中東を対象として研究している私にとってこの経験は有益なものであったと思う。それについて 3 点ほどこの場を借りて報告させていただきたい。

第 1 点としては、「中東・イスラーム」という名前から理解できるように、本セミナーは中東およびイスラームに焦点を当てたものである。一般的にイスラームといえば中東、という固定観念が出来上がっている中では中東以外の地域を忘れがちな傾向にある。しかし、本セミナーでは中東に限らず、参加者の多くが「イスラーム世界」の研究を志している大学院生であり、研究手法も対象へのアプローチ方法としても多様であった。そのため、普段イスラームと多少距離をおいて研究をしていた私にとって、改めてイスラームを扱うことの難しさを実感させられた。というのも、私は中東の経済、主に貧困の削減をテーマとして扱っており、この分野でイスラームを扱う際に、どの程度まで対象となる貧困とイスラームとの関係性を考慮に入れるべきなのか、ということをお悩んでいたからである。その点で、2 日目に行われた飯塚正人先生の「イスラームとムスリム—地域研究でイスラームを扱う困難について」と題するセミナーは、イスラーム世界を研究する者にとってはごく当たり前のことのように思えるが、しかし良く陥りがちな「畏」でもあるということを我々に再考させてくれた。

第 2 点としては、第 1 点で既に触れたが、様々な大学院から全くと言っていいほど研究内容の異なる参加者が集まっていた点である。他の大学で研究している大学院生との交流の機会が少ない状況の中で、こういった場合は単に“学术交流”ということに限らず、少なくとも同じ様な志・不安を抱いた大学院生との“交友としての交流”という機会でもあり非常に重要なことである。セミナー時間以外でもお互いに意見交換をすることによって、自分に今何が欠けていて何をすべきなのか、ということを考えさせてくれるきっかけになったと思う。

第 3 点としては、セミナーにおいて発表者の問題点に対する先生方の的確な御指摘・質問は、発表者ではない受講生にとっても大変有益であった。所属する大学院のゼミ等では普段忘れがちなことを改めて意識させられ、身が引き締まる思いでした。

総じて、単に知識面だけに限らず、少々大袈裟かもしれないが研究者にとって必要となる実践面でも学ぶことができたことは、まさにこういった場だからこそだと思う。最後になってしまいましたが、諸先生方、ならびに事務の方々には大変お世話になりました。深く感謝いたします。

## 朝田 郁(京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科)

中東・イスラーム教育セミナーと題された今回のプログラム、そのタイトルには深い意味が込められている。私は最初、これを「中東」かつ「イスラーム」の意味に捉えていた。数学の積集合のように、中東とイスラームが重なる部分だけに注目したイメージである。

私自身は東アフリカのムスリム社会を調査対象としており、研究テーマはイスラームに含まれるものの、フィールドが中東ではないことから、場違いなところに来てしまったのではないかと危惧していた。しかしセミナー初日に行われた趣旨説明で、実は「中東」と「イスラーム」の間の中黒は「および」を表すために付されており、一連のプログラムでこの両者を広く取り上げていくことが明らかにされたのである。私はそれを聞いてほっとすると同時に、未知の世界に乗り出すような気がしてワクワクした。

今回のセミナーでは、私のテーマと関わりの深いイスラームの側面だけに注目しても、その世界の広がりや反映してか、講師陣と参加者が取り上げる地域は非常に多様なものとなっていた。中東だけには留まらず、近年注目を集める中央アジアの動向について複数の方々が発表し、さらに東南アジアのムスリムの活動に関してもレクチャーがあった。

面白いことに、この東南アジアのイスラームと、私がフィールドとしている東アフリカ文化の間には密接な関係がある。一例を挙げると、預言者生誕祭で読誦されるカスィーダ(長詩)では、ダル・エス・サラームやモンバサなどの東アフリカ沿岸部の都市に加えて、インド洋をはさんだインドネシアのアチェでも、同一テキストが使用されているのである。

イスラーム世界を陸からだけでなく、海から見るとこの謎は解けてくる。クルアーン 18 章 60 節に「2つの海」という言葉が出てくるが、これは伝統的な聖典解釈の説によれば地中海とインド洋を表しているとされる。この表現を借りると、従来のイスラーム研究は「2つの海」が接する場所である西アジアと、北アフリカなどの地中海岸の地域を中心に行われてきたと言える。しかしその他方で、もう一つの海であるインド洋は、西アジアを超えて東アフリカ、インド、東南アジアを相互に結びつけた海域世界を形作ってきたのである。イスラームもそのネットワークを使って、拡散・浸透していった。預言者生誕祭に観察される共通した儀礼や慣習なども、この過程で共有されてきたのだと考えられている。

かつてウラマーは知を求めて、陸を歩き海を渡ってイスラーム世界の各地を歴訪した。それは、各地に張り巡らされたムスリムのネットワークがあって初めて可能になったものだと言える。今回の教育セミナーにおいても、地域やテーマの枠を超えて多くの研究者や同世代の院生たちと知り合い、知のネットワークを築くことができた。これは本セミナーの目指すところが、中東とイスラームの両方を合わせ持った、数学の和集合のような場であったからこそ実現されたものである。ここで得た知見やつながりを活かしながら、私もウラマーのように新たな発見を求め、既成の概念にとらわれない研究を行っていきたい。

## 岩下 曜子(名古屋大学大学院国際言語文化研究科)

2006年9月に東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所において開催されたイスラーム教育セミナーは、論文を執筆する学生にとって、建設的な議論の場となり、大変有意義なものであったと思う。本セミナーの感想は、以下の三点にまとめることができる。

第一に、最前線のイスラーム研究の知見が得られたことである。中東地域のみならず、中央アジア、マレーシアなど多岐にわたる地域研究の報告を拝聴することで、自らの研究対象のフィールドの枠に収まることなく、包括的かつ動的なイスラーム世界を知ることができた。それは私に新たなイスラーム観をもたらすと同時に、どの位置からイスラームを語るのか、改めて問い直す機会となった。

第二に、イスラームに関心をもつ人々と交流がはかれたことである。様々なディシプリンや研究分野をもつ学生から刺激を受けると共に、多様な意見に触れることで視野を広げることができた。また、異なるディシプリンをもつ学生に対して、どの様に自分の論を展開することが有益であるのか、考える機会を与えられた。興味、関心を共有できる人々との交流は、大変充実したものであった。

第三に、先生方から学んだ研究者としての志である。学生の研究発表に対するコメントのひとつ一つは、さらに論文が深まる示唆を与えられたものであり、大変勉強になった。また、どの様な質問に対しても、真摯に答えて下さり、先生方の知識の豊富さだけでなく、人間的な深さを感じずにはいられなかった。さらに、学生に対して、研究者として必要な姿勢を自ら示して下さい、先生方と共に学び合えたことを嬉しく思った。

総じて、本セミナーは先生方にも学生にも恵まれ、大変有意義なものであった。このような機会を与えて下さった先生方、スタッフの皆様に感謝いたします。また、イスラーム教育セミナーの益々のご発展とセミナーに参加された皆様のご活躍を心よりお祈りいたします。本当にありがとうございました。

## 加藤 眞佐美(千葉大学人文社会科学研究科)

今回、本セミナーに参加できたことは、私にとって大変刺激的で有意義なものであった。セミナーは4日間の講師陣の講義と受講生の発表によるもので、大変充実した時間を過ごすことができた。それは、今後の自分自身の研究のあり方を深く考えさせるものになったと思う。

先生方の講義は、多岐にわたるもので、中東・イスラームという枠組みのなかでさまざまなディシプリンが存在し、それがお互いに影響しあうということを通じて認識できたことは大変興味深い。ある事象を見つめる視点がどこにあるのか、それによって見えるものがどう違ってくるのかを考えることがいかに重要なことであるかを再認識した。さらに、本セミナーに参加したことは、中東とは何か、イスラームとは何かを改めて自分自身に問い直す契機になった。自分がすでに承知のものとして扱いがちである中東あるいはイスラームという言葉は、何を意味するのか、誰に対して発する言葉なのかをもう一度考える必要性を強く感じた。私にとっては専門外あるいは不勉強で初めて聞く内容も多かった。しかし、そこから何を見いだすか、という基本的な姿勢を学ぶことで、どの課題も決して無駄なことではなく中東・イスラームを考える上で関わりがあることが理解できた。これによって、当然のことながら自分の学問的知識の不足を補うための勉強の必要性も改めて強く感じた。

受講生の発表では、自分と同じ立場の学生の研究への姿勢、意欲を目の前で見ることができ大変刺激になった。発表者をはじめ活発な質問や議論によって、受講生の方々の積極性、熱意を感じることができた。発表者に対する質問、批評は自分自身に向けられたものと考えてことで、自分の研究の方向性を改めて問い直す契機になった。また、プレゼンテーションはレジュメの作り方から発表方法、話し方、ツールの利用など大変参考になった。このようなプレゼンの機会およびそれに対する意見、批評の場は大変貴重である。もし、次回チャンスがあれば、積極的に参加したいと考えている。

おそらくめったにお目にかかれない先生方、および遠方の学生の方々を含めた多くの方と知り合い情報交換ができたことは、とても有意義なことであった。お互いの大学や自分の研究に関する情報交換、あるいは研究に対する心構え、姿勢などさまざまな事を話し合うことができた。個人的には遠方からの通学に時間がかかり大変ではあったが、参加した価値は十分あったと思う。4日間という短い期間ではあったが、大変貴重な時間を過ごすことができた。最後に、このような機会を与えてくださった本セミナーの先生方、事務局の方々のご尽力に感謝します。ありがとうございました。

## 小村 明子(上智大学大学院グローバルスタディーズ研究科)

私が中東・イスラーム教育セミナーに参加した理由は、自分の研究テーマの参考になることを得るだけでなく、自分の研究対象としているテーマやフィールド以外の見識を深めることや、受講生との意見交換が出来ればと思ったからでした。

セミナーが開始する前までは4日間は長いように感じました。しかし、実際セミナーの各プログラムが始まり、先生方のご講義そして受講生の発表が行われますと、あっという間に時間が過ぎていったように思いました。4日間それぞれが非常に充実しており、先生方のセミナーでの研究方法論等の話や自分の研究フィールドとは違う受講生の発表を通して、より自分の見識が深まったように思いました。

受講生発表後の質疑応答の際は、非常に有意義な意見が多かったように思われました。とりわけ、各先生方のご意見には、まるで自分の研究が指摘を受けているかのようで、今後自分の研究をすすめていくにあたって、大いに役立つことばかりでした。

また、休憩時間や懇親会の席においても、様々なディシプリンや研究テーマを持つ受講生の方々と交流を持つことが出来ました。このような交流の場における意見交換は、全く初めての経験で、それ故に非常に有意義に過ごすことができました。

実を言えば、私は今年再度博士前期課程に入りなおしております。以前の学校では、中東地域もしくはイスラームを研究対象としている学生が私一人だけということがあったため、学生同士の意見交換の場がありませんでした。また、学外でその様な場に参加するための情報も容易に入手することができなかつたため、今まで自分の研究に関して意見交換をするという機会もありませんでした。セミナーだけでなく、このような交流の場を通して、自分の研究テーマだけでなく、他の受講生の研究テーマを伺い、情報交換やそれぞれの意見を出し合うことは意見を述べる双方にとって非常に刺激を受けたように思いました。

本年度は夏季休暇中多忙であったため自分の発表が出来ませんでしたが、再度参加する機会があれば、本年度の経験を活かして、自分の研究発表が出来ればと思っております。

## 島田 大輔(中央大学大学院総合政策研究)

私は、他の受講生の皆様とは違い、イスラーム及び中東問題に関し専門的な学習を積んでいません。にもかかわらず、当セミナーを受講したのは、私自分のテーマが少しばかりイスラームに関連していたこと、にもかかわらず不勉強であったため体系的なイスラーム知識の摂取を必要としていた等が受講理由であります。そのためか、受講前は報告や議論について行けるか不安な思いが強かったですが、終わってみれば四日間のセミナーを有意義に過ごすことが出来ました。

セミナーに参加してよかった点は以下の二点です。

一つめは、セミナーを主催されている AA 研の受け入れ体制が整っていたことです。事務の方々からは受講の何ヶ月前から定期的に通知が届き、また、個人的な質問にも逐一答えていただき、安心してセミナーに向かうことができました。先生方も、院生相手だからといって手を抜かれることなく、真摯にセミナーに向かわれている姿勢がひしひしと伝わり、当方としても襟を正させて頂きました。報告に寄せられたコメントも、その一つ一つが示唆に富んでいて、報告者のみならず、聴取者としても得るものが大きかったです。特に、受講終了後の、受講生一人一人の感想・評価に対しても真剣に耳を傾けられている姿を見て、受講してよかったと改めて思いました。

二点目は、受講生との交流です。「イスラーム」もしくは「中東」という共通項だけで、よくもこんなに集まったかと思う程、ディシプリンも、地域も、関心も多様で、大変刺激を受けました。そもそも、当セミナーは課外活動でしたので、それを承知の上で参加された受講生一人一人の問題意識が高く、有意義かつ純度の高い学術的交流ができました。

しかし、多少難点があったことも指摘できます。まず、「教育」セミナーと銘打たれているのににもかかわらず、個々の報告内容が「専門的」であり、多少の敷居の高さを感じました。確かに、事前に要旨をお配り頂いたり、基本的な事項説明に紙面を割かれたりと、配慮はして頂いたと思います。しかし、興味深い個別の問題について知ることは出来ましたが、私自身が求めていた体系的な知識摂取は難しかったのでは、と思います。

もう一点は、日程の問題です。四日間という短い期間に毎日朝から晩まで、毎日3、4本の報告を聞くのは集中力が持ちません。特に午後最後の報告は全然頭に入って来ませんでした。これは眠気に耐えるのがセミナーの目的だったのかと幾度となく思ったのは事実です。できれば、もう一日二日余裕持たせてカリキュラムを組んでいただけたらと思いました。もちろん、遠隔地からの参加者の方もいらっしゃいますので、議論の余地はあるかと思えます

とはいえ、四日間の長丁場セミナーを受けたこと、先生方と受講生の皆様と密度の濃い時間を共有できたこと、懇親会等を含めた場所で色々話を伺った上で培えた克己心はかけがえのない財産になったと思います。

## 清水 理恵(上智大学大学院グローバル・スタディーズ研究科)

今回のセミナー参加は、私にとって想像以上に有意義なものとなった。第一に、あらゆる分野や地域の角度から見た「中東・イスラーム」の報告を聴くことができ、それらに関する新鮮な知識を得られたことが貴重であった。また第二に、参加受講生や先生方と一日中行動を共にすることにより、人間的な親交を深めることができたことも、大きな収穫となった。そして最後に、共に学ぶ中で他の受講生に刺激され、自ずと意欲と競争心が湧いてきたことが、私にとって何よりも有益であったと言えよう。

ただ一つ残念なことには、当初私は、本セミナーにおける発表を予定していたが、都合により今回は断念する結果となってしまった。それ自体でも十分心残りなのであるが、それ以上に、企画・運営をしてくださった多くの先生方や事務の方々へ多大なご迷惑とご心配をおかけしてしまったことを考えると、本当に申し訳なく思い、ここに改めてお詫びを申し上げたいと思う。しかしながら、それでもセミナーにおいては熱心にご指導いただき、また飲み会の席においても気さくに会話を楽しむことができたこと、またその時間からさえも多くを学び取ることができたことに、今心から感謝したいと思う。

次に、本セミナーに対する要望としては、まず以下の事を提案したい。それは、受講生が発表を終え先生方からのコメントをいただく際、その評価に関しては、基本的には毎回同じコメント内容の項目を設けるなどして、そのコメントをより体系化することである。例えば、①発表の仕方、②資料の用い方、③方法論、④理論的整合性、等々である。毎回一貫性をもって評価をいただけたならば、比較を通しそれぞれの発表者の良い点・悪い点が明確になり、本人はもちろん、分野の同じ、または異なる聴衆の受講生全員にとっても、よりわかりやすくなるのではないだろうか。

さらに、細かいことではあるが、もう一点、改善を願いたい点として、受講室内の空調設備を挙げたい。今回は9月も下旬にかけての開講ということで、本来季節的にはそれほど過ごしにくい時期でもないはずなのであるが、今年のセミナー期間中は日中陽が照り気温が上がる日が多く、特に午後の授業になると室内が暑くなり、頭がのぼせてしまうようなことが度々あった。些細なことに過ぎないが、もし改善可能な余地があるのであれば、次回はぜひその点も向上させていただければと思う。

白神 小鈴(京都大学大学院人間・環境学研究科)

この度、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所にて開催された中東・イスラーム教育セミナーに参加し、とても有意義な時間を過ごすことができました。この教育セミナーに参加して良かった点は大きく3つある。

1点目は、そのタイトル「中東・イスラーム」が意味しているように、対象としている学問領域が学際的な点である。「中東」にだけ特化したものではなく、また「イスラーム」についてのみ特化したセミナーでもない、そのどちらをも包含し、かつそれらをどのような切り口で研究するものでも参加が可能なセミナーである。このことは、講義をされる先生方、また参加者の学問領域の幅の広さからも感じられる特色である。実際、私自身、先生方の講義をはじめ、参加者の多様な研究を通して、自分の研究領域に限った狭窄な視野を改めて考え直す機会となった。

2点目は、セミナーが形式にこだわった堅苦しいものではなく、参加者がお互い交流しやすいアットホームな雰囲気であった点である。アットホームな雰囲気を感じたもののひとつが、1日目のセミナー終了後に用意された、立食形式の懇親会であった。食事をしながらざくばらんに先生方と話をしたり、研究の相談をしたり、また参加者同士が交流を深められる機会を持てたことは、セミナー開催期間である4日間を濃厚なものにするためにも重要な会であった。(非公式の懇親会も何度かあったが、それも先生方や参加者同士の新たな一面を知ることができ、貴重な時間であった。)

3点目は、特に先生方の講義から、研究をする上での基本的な姿勢を学べた点である。講義のテーマはそれぞれ異なっても、「研究」というものがどういうものであるか、ある対象を研究する場合の方法論はどうかといったテクニカルな部分、また実際に先生方が「研究」に取り組むことになったきっかけや、これまでの「研究」における体験談などを含みながらの講義が展開され、とても参考になった。以上3点が、特にこのセミナーに参加して良かったと思う点である。続いて、セミナーへの評価という点で1点だけ気になった点があるので以下に述べる。

それは、会場の立地についてである。会場設備やセミナーの内容はとても充実していて良かったが、遠方から参加するものにとっては都心部から離れた会場であったため、少し不便であった。実際に宿泊先を選ぶのにも苦労した。会場がもう少し便利な場所であれば、遠方から受講するものにとっても、また仕事、家庭を持っているものにとっても都合がいいのではないかと思う。

最後に、このような有益なセミナーに参加させていただいたことを大変嬉しく思う。

先生方、ならびに運営をしてくださった方々に、厚くお礼を申し上げたい。

## 平 寛多朗(東京外国語大学大学院地域文化研究科)

「時間だから、そこで発表終わりにして」

大塚先生の一言で、最初の受講生の発表は打ち切られた。衝撃だった。大塚先生はその理由を淡々と説明し始めた。

二番目の受講生の発表者が始まる。フィールドワークから収集した画像をパワーポイントで示し議論を展開する姿に、彼も同じ修士生かと自分を振り返り一抹の恥ずかしさを感じる。

そして質疑応答。

「これは君の感想なのか？それでは学問にならない」

またも大塚先生の一言であった。

わきあいあいの雰囲気想像していたわけではない。しかし、ストレートな指摘に胃がきりきりきしむのを感じた。そして、自分の進もうとしている世界は、こういう世界なんだと臍げに思った。

初日終了後の懇談会で、何を言われるかに不安を覚えながら大塚先生に近づく。次々と自分の不備を突かれる。黒木先生から最後に一言。

「君はまだ煮詰まってないね」

すみませんと謝る私に、先生はなぜ謝るのかというようであった。

大塚先生を始めとする諸先生方のご指摘は、何も学生を苛めようとするものではなく、『教育セミナー』の名のとおり学生の教育を主眼としている。4日間のセミナーを通して一番強く感じたのはその点であった。自分とは関係ない分野の発表であれ、先生方が指摘されることは、そのまま自分の勉強にもなる。今セミナーを通して、何が自分に足りなく、どの点をより深くしていかなければならないかといったことがより明確に見えた。

来年は修士論文を書く年である。来期もこのセミナーに参加し、ぜひ発表して諸先生方の意見を聞いてみたいと強く思う。それが自分の力になる。そしてよりよい形で論文を書きあげられたら、と思う。

また今セミナーにおいて、様々な分野に関心がありディシプリンの違う学生に出会え、話せたことはとても貴重であった。他大学の話や諸先生の逸話などが聞けたのみならず、多様な経歴を持つ人達と話せたことは、視野が狭くなりがちな自分にとって人生勉強にもなった。

以上が感想です。

## 飛内 悠子(上智大学グローバル・スタディーズ研究科)

2回目の参加となる今回も、大変貴重な時間を過ごさせていただきました。前回同様、多様な分野、地域からの受講者を通して、中東・イスラームという場の広さ、深さに驚かされました。

地域研究専攻という専攻柄(!?)普段から多様な地域、ディシプリンの中で日々を過ごしていますが、実際なかなかお互いの研究分野の詳しい状況を知る機会があまりないのが現状です。

そういった状況にいたるため、このセミナーでじっくりと中央アジアやトルコ、東南アジアといった私の研究するスーダンと違ったイスラーム地域の発表を聞くことが出来て、大変勉強になりました。また、歴史学や、イスラーム思想、社会学、政治学などの異なるディシプリンを専攻する先生方や、受講者の方々の発表や講義はとても刺激的でした。特に近代トルコのアーヤーンの様子を資料から追いつけた研究過程をお話して下さった、永田先生の講義は、歴史学というディシプリンのあり方、その凄みの一端を垣間見ることができ、興味深かった講義の一つです。「学問」の存在感を感じました。それと同時に、私が文化・社会人類学を専攻しようとしているためもあって、ふとした拍子に出るフィールド体験のある先生方のお話が楽しみでした。

そして、発表ごとの先生方、受講者の方々の質問、コメントも様々な角度からなされ、ああ、こういう見方もあるのか、と感心させられました。自分の物事に対する一面的な見方を見直すきっかけをいただいたと思っています。発表や講義がすべて知らないことばかりであり、勉強不足をしみじみと感じさせられる機会でもありました。猛省をして自分にできることを少しずつでもやっていきたいと思います。

最後に、今回のセミナーでも忙しい中参加し、喧々諤々の議論、コメント、アドバイスをくださった先生方、いろいろと気を配ってくださったスタッフの方々に感謝したいと思います。ありがとうございました。

## 富田 祐子(東京外国語大学大学院地域文化研究科)

私は今回初めて、アジア・アフリカ言語文化研究所で、2006年9月19日から22日の4日間にわたって開催された、中東・イスラーム教育セミナーに参加した。このセミナーは主として全国の大学院生を対象にしたもので、先生方の講義と、学生の発表で構成されている。中東・イスラームが関係する幅広い地域に関する研究を人類学、歴史学、政治学等といった観点から、学際的に学ぶことができた。以下、4点にまとめてその感想を述べたいと思う。

1) まず、内容の多様性に目を開かされ、視野を広げることができた、という点で、このセミナーは自分の研究に非常に有益であった。中東・イスラームに関して、自分の専門でない地域や分野に関する様々な講義・発表を受講する中で、新たな知識や問題提起、研究のアプローチ方法に触れることができた。同時に、自分の関心を再確認することができた。

2) 先生方の講義は、それぞれの専門の知識を与えるだけでなく、学問の方法論、研究の背景や問題意識などを、教育上の観点から、特に意識してお話していただいたのではないかと思った。また、オスマン帝国を中心に研究していきたいと思う私にとって、永田先生の講義を聴講できたのは極めて貴重であった。中でも、文書の十分な理解には既存の理論の理解と現場感覚が必要であることが、具体的な例によって話されたのは特に印象に残った。

3) 普段接することのない他大学の学生と共に席を並べ、講義を受け、発表を聞き、質疑応答での活発な質問とそれに対する答えを聞く中で、彼らの知的欲求の高さ、知識の深さが感じられ、刺激を受けた。同時に、研究にはアカデミック・ルールが存在し、それを皆が守ることで初めて、効率的で有効な研究や意見の交換ができるということを改めて認識、経験することができた。

4) 事前に必読文献を指示して頂けるとより良く準備でき、吸収できるのではないかと思った。受講生による発表に関しては、研究発表要旨、参考文献が提供されていたが、専門的な文献が含まれるリストの中から、発表を聞く前に読んでおくべきものを判断するのは困難に感じられた。

最後に、お忙しい中、直接講義をしていただき、親身になってご指導くださった先生方、また、刺激を与えてくださった学生の皆さん、本当にありがとうございました。

## 林 芳哉(日本福祉大学大学院国際社会開発研究科)

今回、中東・イスラームを中心に研究に取り組んでいる方々の話を直接聞くことができる絶好の機会だと思い、参加させていただきました。4日間のプログラムは、受講生の発表と研究者の先生方の発表で構成されており、連日いろいろな研究について、見て聞いて考えることができ、大変充実した時間になりました。発表後には質疑応答の時間がかなり余裕をもってとられており、疑問を持った点や興味のある部分についてさらに聞くことができました。私にとって未知の領域の話が大半を占めましたが、大いに刺激を受けた4日間でした。

私は2年間シリアのダマスカス歴史文書館にて歴史資料の保存・修復の指導をしていました。文書の長期保存の観点から、シリアの行政文書、とりわけオスマン帝国期のシャーリア法廷台帳・証書群などを中心に、劣化状態を見たりして文書を保存すべき「紙」として観察してきましたが、これらの文書がテキストを研究する方にとってみたらどのような価値を持つものなのだろうか、という素朴な疑問を持っておりました。そして中東・イスラームに関する歴史資料は、現在の地域研究においてはどのように扱われているのだろうかというのを、今回のセミナーの発表や講義を通して自分なりに考えてみたいと思っていました。

セミナーを通して様々な方の話を聞きながら、地域研究の対象となる資料についてあれこれ考えをめぐらすことができました。永田先生が語られた、トルコ地方博物館の文書をノートに書き写したものから研究を展開された話は、現在においても文献が語ってくれることの可能性の大きさを少し垣間見ることができた気がいたしました。また、地域研究の資料として新聞やインターネットなどのメディアも研究の手段として使用されうることを知り、それらの資料価値についても考えていく必要性を感じました。

一番考えさせられたのは、研究の方法についてです。研究対象に向かう切り口の違いから見方が変わってくることは、今回の教育セミナーの発表や質疑応答時の議論の中で強く意識させられました。それと同時にいくつかの研究方法の中で自分の立場として選んで築いていくことも議論に参加していくには大切なことなのではないかと感じました。

私は自分の拠りどころとなるのは、物としての「紙」「資料」なので、いろいろな視点の違いにも関心を広げつつ、「紙」であるところの歴史資料を通してこれからも中東・イスラームを見つめていきたいと思っています。

通信制の大学院にて勉強している自分にとって、受講生の皆さんと顔をつき合わせて時間を共有できたことは、もうひとつ嬉しいものでした。先生方、事務局の方々、受講生の皆さん、本当に貴重な機会をありがとうございました。

## 平野 淳一(京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科)

9月19日から22日の4日間にかけて東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所で開催された「中東・イスラーム教育セミナー」は、大きく分けて午前の院生による研究発表と午後の教員によるセミナーの2部から構成され(場合によっては夜半の懇親会も含めて3部から構成され)、極めて刺激に満ちた活況を呈するものとなった。以下、同セミナーに対する私の感想を申し上げたい。

まず、同セミナーに参加した教員や院生に関してである。トルコやアラブ諸国、そしてイランを中心とする「中東地域」のみならず、中央アジアや東南アジア、さらにはアフリカを専門とする人々が広く参集したことは、同セミナーの地域的 다양性を裏付けるものであったといえる。また地域のみならず、歴史的にも現代を中心に前近代、近代と多重性を発揮し、同セミナーの時代的 다양性も保証していた。さらに専門とする地域と時代のみならず、各教員や院生の方々の問題関心やテーマ、方法論といった「ディシプリン」も、政治学、歴史学、文学、人類学、言語学、地域研究等と多岐に亘り、優れて学際的であった。このように、同セミナーは地域的にも時代的にもまたディシプリンのにもあらゆる意味合いにおいて極めて多彩であったといえる。

次に、私自身に関してである。あらゆる意味で多種多様な同セミナーへの参加は、従来の私の研究姿勢に新たな視角から良い意味で相対化をもたらし、今後の研究活動における一定の指針を提供するものであったと確信している。特に他分野・他専攻の教員や学生と議論をおこなう中で、自分の研究をどのような論理で説明し理解してもらえるか検討を要したことは、かえって自らの研究の再解釈と再定位を促すことにつながり、視野狭窄を解除する一助となった。

最後に、今後の研究会や学会といったアカデミックな場における発表や質疑応答の予行演習になったことである。発表者側としては、立論と議論の展開、質疑の受け答え方や発表時間の厳守など、また質疑側としては、質問内容の要点を簡潔に提示してそれへの応答を冷静に聞き取り分析するという、考えてみれば当たり前であるこのような作業の困難さと重要性を、この度のセミナーで痛感し再確認することができた。このようなコミュニケーション・スキルの向上も、「教育セミナー」の一環として位置づけられるであろう。

総じて、「中東・イスラーム教育セミナー」は私にとって従来の予想を裏切ることのない、極めて濃密で刺激に富んだものであった。今後とも是非継続して開催されることを願いたい。

末尾ながら、同セミナーに関与された全ての人々に衷心からの感謝の意を表します。

## 堀抜 功二(京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科)

本セミナーは、中東・イスラームに学問的関心を抱く大学院生が集まる、極めて貴重な場である。今回、四日間のセミナーに参加し、そのことを強く実感するに至った。以下に、セミナーについての個人的な雑感を記す。

セミナーの重要な役割とは、第一に知的交流の「場」としての存在である。つまり、多様な問題意識・ディシプリン・研究対象地域を背景する学生と、第一線で活躍する研究者との交流機会である。学生と研究者が一同に介して交流する場は、学会以外になかなかない。個人的には、普段文献の上でしか触れることのできない研究者と直に話すことができ、これ以上ない刺激となった。また、セミナーの半公式行事(?)とも言える飲み会も、実は重要である。学生同士、そして学生と研究者の間の距離を縮め、ざっくばらんな議論をすることができる。その中で、新しい研究アイデアも生まれるだろう。

第二に、研究内容の深化と発表技術の向上の機会である。本セミナーでは、受講生による発表と、それに対する内容的・技術的な講評が行われた。発表者はもちろんのこと、他の受講生も自らの問題・課題として捉えることができる。普段、各人が所属する演習とは違った環境での発表や議論は、より「他者」を意識することができる。その意味では、時間的な制約はあるが、参加者全員に発表の機会があってもよかっただろう。

以上のように、本セミナーに参加でき、非常に満足している。ただし、いくつかの課題もあると考える。すでに昨年からの指摘されていることであるが、地方在住の受講生に対する受入れ支援(宿泊・交通など)について、再度ご検討頂きたい。東京では、専門に関係する研究会・セミナーなどの機会は豊富にあるが、地方の学生にとってはアクセスが難しいものである。したがって、このような機会は地方在住の学生に対して、よりオープンであるべきではないだろうか。

末筆になるが、本セミナーに参加する機会をご提供頂き、また運営にご尽力して下さいました主催者の皆様に謝意を示したい。

## 牧 良太(東京外国語大学地域文化研究科)

表記されている「中東・イスラーム」が包含する学問領域、研究対象は、地理的にも内容的にも幅広く深い。ゆえに個人で全てを網羅することは不可能で、いきおい個々人の研究対象は、ともすると狭く細分化された「専門領域」に閉じこもることにもなりがちのように思われる。とはいえグローバリゼーションが唱えられる昨今では反グローバリゼーション運動さえもグローバル化しており、国際政治上のホットスポットである中東やイスラームを巡る問題も一地域の問題としてだけでは理解も解決もできない広がりを持つつきを持っている。そのような中で「中東・イスラーム」研究を行なうにあたっては個別的な事例を取り上げるに際しても決して「木を見て森を見ず」ということにならぬよう、常に森への視点を意識し続けることが要求されるのであろう。

本セミナーで行なわれた諸講師陣の発表は各々先生方の研究発表という意味での講演でもあり、また研究対象の選定や手法に関する学生へのアドバイスとしての講義でもあり、非常に有意義であった。それぞれのテーマとする分野や対象は特定の地域であったとしても、そこに見られる社会や歴史、人々の営みは、場合によってはより普遍的でありもする。各講義を聴きながら自らの研究にそれをどう活かすか、そこで取り上げられている問題が自分の研究対象ではどのように位置づけられているのか等々、比較する視点の大切さを実感することができた。当たり前のことではあるが、何を何のためにどのように研究するのか、といった根本的な姿勢と手法に関しても大いに参考になった。逆に言えば、学生側の発表に関しては各自よく研究しつつも、それによって何を明らかにしようとするのか、なぜその研究が必要なのか、といった動機に対する自覚が総じて薄かったようにも思われる。個別の研究が全体のなかでいかなる位置づけされるのかということに関してはより自覚的であるべきだろう。

エドワード・サイードは「知識人はアマチュアたるべきである」と説いた。今回、臼杵教授の講演(イスラエルにおける東洋系・アラブ系ユダヤ人に関するもの)に関して大塚教授は、日本では知識人といわれる人であってもこのことを知っている人は1パーセントにも満たないであろう、ということを示された。そのような状況を憂うとともに、ではそのことを知った我々は何をなすべきなのか、ということを考えざるを得ない。もちろん研究者が活動家になる必要はないが、研究によって得られた「知」を個人で所有しているだけではあまりにももったいない。それらをいかにして社会に反映させてゆくか、ということは「研究者」そして「知識人」の課題であろう。50年以上にわたり世界の主要ニュースであり続けながら一向に解決が見えない「パレスチナ問題」を見るにつけ、そのような歯がゆい思いが募る。